

研究発表 (2019.2.16)

柳田国男・松岡静雄ゆかりの藤沢周辺地名

日本地名研究所『地名と風土』編集長 小田 富英

一、はじめに

谷川健一が亡くなってから、研究所をつぶしてはならないとお手伝いさせていただき、『地名と風土』を

復刊し今に至っています。会長の鈴木

木富雄さん(慎んでご冥福をお祈り

いたします)には、研究所の理事と

してお世話になっていまして、私が、

柳田国男の年譜を作っている(三月

に「年譜」を『柳田国男全集』別巻

1として刊行いたしました。)との

話から、今回の機会をいただきました

た。今後一緒に学ばせていただこう



と思ってお引き受けしましたので、この地の地名に詳しい皆さまには、物足りないかもしれませんが、よろしくお付き合いください。

二、水彩画家大下藤次郎と二人の交流

柳田国男は、現在の兵庫県福崎町

で生まれた松岡国男が旧姓で、その

松岡家の男ばかりの五人兄弟(鼎・

井上通泰・国男・静雄・映丘)が揃っ

ての写真がこれ(略)です。

これは、明治四二年、静雄の渡欧

記念に撮ったものです。柳田国男に

とっては、『遠野物語』の原稿を書

き終えた頃で、精神的にも高揚して

いた時期と言えます。次の写真はそ

の一〇年前、明治三二年一月二五

日に撮った記念写真で、これも静雄

のオーストリア大使館付武官として

渡欧が決まった頃のもので、ここ

らは、兄二人はいませんが、松岡国

男、映丘の他、国木田独歩、乾政彦、



菊地駒次、松本丞治といった国男の友人たちが脇を固めています。兄弟の仲の良さを象徴している写真と言えるでしょう。

兄が自分の友人を弟の応援に駆け

出すのと逆に、弟が知りあった人物

を兄に紹介するといったケースが、

大下藤次郎(一八七〇—一九一一)

という水彩画家との関係です。

大下藤次郎は、軍艦に便乗して南

洋諸島からオーストラリアに渡航し

た経験をもつ志賀重昂の話聞き、

同じ方法でスケッチ旅行に出るため

奔走します。そして、明治美術会

特派員として軍艦金剛に便乗する正

式の許可が下り、明治三十一年三月

一七日、横須賀港を出港してオース

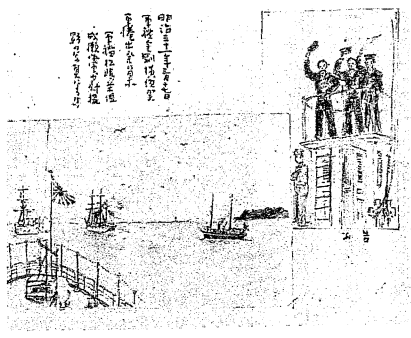
トラリアへと向かうのです。

この金剛に、前年の二月に海軍兵学校を首席で卒業したばかりの静雄が乗っているのです。

松岡国男は、その静雄を送り出すために、一三、一四日と二泊横須賀に泊まりに来たことがわかっていま

す。大下は、艦内の士官室や水兵の生活などをスケッチしていくなかで、静雄ら士官たちと親しくなっていました。この年の大下の日記の「交友」欄には、軍艦内で広がった交友の輪を象徴するように静雄や山梨勝

之進はじめ二六人の名前があがっているほどです。



軍艦金剛横須賀軍港出航の景 1898

(土居次義『水彩画家大下藤次郎』美術出版社刊より)

この遠洋航海は、六ヶ月に及び、メルボルンでは美術館に行ったり、オペラを見たりするなか、松居副艦長の入院や大下自身の頭痛歯痛などのトラブルもあり、軍人民間人の垣根を越えた付き合いになったようです。九月一六日午前八時、無事に横須賀港に帰着し、その日は館長招待の宴席にも大下は参加していません。

帰国後の明治三三年一月九日、静雄は、兄国男を連れて、小石川区関口駒井町にある大下藤次郎の自宅を訪ねます。大下日記のこの日の条に、「松岡国男松岡静雄両氏来り語る」とあります。よほど意気投合したのでしょうか。この日からの大下の行動に次のような変化がみられるので

「一月二七日 中央気象台に岡田氏を訪ひて不逢。
一月二八日 初めて田山録弥氏に面会す。
二月一六日 中央気象台に岡田氏を訪ひ雲の説をきく。
四月五日 布佐にゆき松岡氏に投ず。桃花の図一枚を得たり。八

日松岡氏を辞し正午帰宅す。
九月一日 田山氏に諏訪の森一面を貸す。
九月三日 独乙に軍艦を受取にゆかれし松岡少尉帰朝 訪問さる。」

「中央気象台の岡田氏」とは国男の友人の岡田武松で、田山録弥とは花袋のことです。

さらに、布佐の松岡氏とは、国男、静雄の長兄、松岡鼎のことで、これらの行動は、すべて国男に紹介されて動いていることがわかります。さらに、私が作成していた柳田国男年譜で不明であったことが、この大下日記から判明したのです。柳田国男の発表されていた歌に次のようなものがありました。

「七月青梅に住める大下氏の許へ
木がくれにさゆりなでしこさく
といふ たまの夏山なつかしき
かな」

この歌は明治三四年の七月に詠んだ歌であることはわかっていたので、大下とは誰かはわかっていませんでした。

ところが、この大下藤次郎であることが、大下日記からわかったのです。七月八日の条に、「東京より柳田国男君ら来らる。」とありました。そこで、私は、「柳田国男年譜」に次のように記すことができたのです。

「明治三四年七月八日 青梅に転居した水彩画家大下藤次郎を訪ね、「木がくれにさゆりなでしこさくといふ たまの夏山なつかしきかな」の歌を詠む。」

なぜ多摩の夏山が懐かしいかということも、年譜事項ですが、ここでは触れないでおきます。静雄と国男との関係のなかで、大下藤次郎という画家がキーパーソンでいたことを導入としてお話いたしました。

三、柳田国男ゆかりの神奈川

次に、神奈川県と柳田の関係をおさらいしてみます。ひとつひとつについて詳述するスペースがありませんので、箇条書きにしてみます。
ア、柳田家の別荘 茅ヶ崎

ウ、柳田の出自 大磯柳田大社
エ、柳田社会科の実践 西生田小学校

オ、自らの墓地選択 生田
カ、ダイダラボッチ伝説の地 淵野辺、大沼、小沼

キ、割烹紀伊国屋、丸山教本部分 登戸、榎戸

ク、「水曜手帖」の散歩コース 境川、深見、柳明、王禅寺
ケ、講演会 鎌倉、川崎、藤沢

今回の柳田国男年譜では、登戸の丸山教本庁の調査から、第三世教主伊藤葦天と柳田との関係が明らかに、数々のエピソードを組み込むことができました。今後も新しい発見がありそうです。注目してみてください。



イ、柳田の定宿 国府津館

また、興味深いのが「水曜手帖」の散歩です。柳田没後の『定本 柳田国男集』第三巻に『水曜手帖』が収録され、文庫全集にも載ったことから単行本と勘違いしてしまうのですが、本当は未刊の書なのです。柳田国男は、いつか次のような目次の書を出したいと思っていました。

「目次

水曜手帖（東京近郊の日帰り

出来る地域）

ヂンダラ沼記事

野中の清水

野火止紀行

高見山越（高見山近傍の口碑）

磐城の野路

瀬戸内海記事

瀬戸内海海人

境川の橋」

昨年この会での研究発表でも、糸智子さんが「山川菊栄の見た村岡」(『藤沢地名の会会報』第九七号)として触られていますので参考にしてみてください。

この幻の本は、「境川の橋」がまだメモ的なもので、メモのままでも

出すべきと言う周囲の声を抑えて刊行に至らなかったものと言われています。境川のすべての橋を渡っている柳田の見た人々の生活を再現できなくても、その記述からわかることを追うことも今後の大きな課題となるはずで。

近いうちに、「水曜手帖」の散歩コースを柳田の文を読みながら歩きたいと考えていますので、また一緒にできればいいですね。

四、国男と静雄の学問上の

共闘と共振

今日のお話の本题になります。

海軍武官として活躍していた松岡静雄は、大正に入るところから、海軍内の位置が変わってきます。

第一次世界大戦が勃発した大正三年には、臨時南洋群島防備隊参謀として、ミクロネシア諸島を転戦し、ドイツ軍が撤退したあとのポナペ島の統治にあたります。この時の経験がその後の静雄の学問を決定づけ、大正六年の『南溟の秘密』から『太平洋民族誌』へと民族学者の道を歩むこととなります。一方の柳田は、

南への視点や島への注目を形にしなから、一国民俗学、一国民俗誌学を確立していくわけです。これが学問上の共振です。もうひとつの共闘というのは、二人で日蘭通交調査会を設立するために東奔西走したことです。

ここで問題となるのが、静雄の海軍退役の時期と理由です。

『鵜沼』第七五号（平成九年九月）

に、高木和男さんの「松岡静雄先生が海軍をやめられた事情について」が載っています。

「毎日新聞の海軍報道班員であった新名丈夫が戦後ある雑誌に「日本海軍にこのような大学者がいた。それだけではない、松岡が海軍をやめた真相を知る必要がある。かれは統帥権というものを軍部の手から離して内閣にわたさねばならぬと主張し、それを論じた建白書を提出した。そして上司と衝突して、嫌になって飛び出したのである。(略)」と書いている。」

二、二六事件の時には、鵜沼海岸の駅から自宅（神楽舎）まで訪問客が列をなしたと書いていると紹介しています。

こうした反骨精神の持ち主であった静雄を兄国男はどう評していたのかの興味が湧いてきます。静雄についての思い出は、戦中の「太平洋民族誌の開創 松岡静雄」という座談会のもと、戦後の『故郷七十年』に収録された「兄弟のこと」がありますが、前者は戦中ということからか、病気が海軍を辞めさせ学問に向かわせた理由と述べるに留まっています。しかし、後者では「ある時車中で斎藤実さんに会った時、親切に弟のことを注意してくれたことがあり、本人にもよく話したが、いっとうに遠慮するようなこともなく、かなり批判的なことをいうので、帰国しても軍令部にいることは少なく、いつも局外者という地位にとどまっていた。」と少しつつこんで述べているのです。

この「ある時」というのはおそらく大正の初めのことなのでしょう

が、はっきり何年何月のことがわからぬので、私が作成した柳田国男年譜には入れられなかったのが残念なエピソードのひとつになっています。

五、藤沢周辺の「サンヤ」地名

地名の話から外れてしまったようなので、最後に「サンヤ」地名について考えたいと思います。

柳田国男が終の棲家を選んだ成城の自宅周辺の地名も「山野」です。

柳田の「成城の地理書」というエッセイのなかの文章を紹介します。

「この辺はもと山野と呼ばれて居る所でした。山野とは、今の言葉で言えば薪取り場であり、開かずにおいた共有の薪の採集地であったのです。喜多見の山野と祖師谷の山野とあり、両方の境がはつきりしなかつた様です。薪を取る場所とは言え、利用価値が低く余り大切にされませんでした。」

雑木林が武蔵野の風景となつた時から、薪の採集場、保管場所が「サンヤ」と呼ばれていたようです。千葉県市原周辺の方言で、薪を切りに

林に入ることを「サンヤする」と言っていたようですので、この柳田説はこうしたことが背景になっているでしょう。

さらに宮本常一は、自分が住む「府中新宿山谷」は、最初は入会地であった所を新宿の人たちが拓いた「散野」であったと推理していきます。（『私の日本地図 武蔵野、青梅』）薪の保管場所としての入会地が、新開地となつていくことは必然でしょう。

私が生まれた土地も小金井の中山谷で、上山谷、下山谷と続く地名がずっと記憶に残っていました。教員になつて地名で歴史を教えることができるのと知つた時に、三鷹の「山谷」を調べ、土地の人にここは「ザイヤ」と読み、点在する家を意味していると聞いた時の驚きは今でも鮮明に記憶に残っています。

「サンヤ」の地名解は、他にもあり、「自然地形説」や「産屋説」、「家の数説」など多様ですが、少なくとも、武蔵野台地に散在している「サンヤ」は、柳田の「入会地説」か、宮本常一の「新開地説」に集約されると思

います。時代だけが違うので、この二説は同根でもあります。

余談ですが、柳田の友人、田山花袋も終の棲家は代々木山谷でした。

柳田が地名でつながっていると感じていたとしたら面白いです。

そんな関心から、藤沢周辺の地図を見ると、こちらにも「サンヤ」が各地域に一つ二つは必ずあります。

藤沢地域の「山谷」は、新田開発でつけられた地名であることを、すでに、この会の金子雄二さんが指摘

し、「藤沢市域・近郊のサンヤ地名と新田開発（『藤沢地名の会会報』第五八号、二〇〇五年五月）に発表されています。藤沢地域だけでなく、

長後、御所見地域にもこのように「山谷」「山野」「三谷」があります。

面白いのが、御所見地域で、大正十年の頃の「山野」が「山谷」、「菖蒲沢山谷」が「菖蒲沢境」に変わって

いることです。すでに皆さんは、その事情を把握されているのでしようが、私には不思議というか、調べてみたいことのひとつになりました。

六、まとめ

「日本人とは何か」と問い続けてきた柳田国男が、その結論のように述べているのが、「事大主義」と「無知の相統」であったと私は思います。

谷川健一は「日本人はかつて、「小さきもの」への愛をもっていた」と言い、地名研究は「事小主義」の代表と位置づけました。さらに自分たちが「無知」であったことを次の世代の若者たちに伝えていく必要があると力説した柳田は、まさに地名研究こそ「無知の相統」の代表と思っていたのではないのでしょうか。

私たちもまた、このままでは「無知」すら「相統」でなくなつてしまひそうです。

この六月、遠野で開かれる「第三八回全国地名研究者大会」に来て頂いて、一緒に「事小主義」と「無知の相統」の実践としての地名研究の可能性を考えてみませんか。遠野でお会いするのを楽しみにしています。

本日は拙い話にお付き合いいただきありがとうございます。